

京都地方法務局

ジョーシス氏建言第三

17



414
A1349
2

第十四号覚書



三
号覚書
啓上仕候然者兼テ差出置候第十六十七
号覚書并ニ第二十号覚書ノ儀ニ付キ「ジヨ
ン」氏ヨリ別紙下野常陸下総等ノ諸國ニ有之候
荒地報告書差越申候間則閣下ニ謹呈仕候尤モ
右別紙ノ中ニハ「ジヨーン」氏總体裨益ノ事柄
ヲモ論申候間左様思召可被下候謹言

千八百七十五年

一月二十三日東京ニテ

チャールズ、ウ、レゼンドル

大蔵省事務局

大正十一年四月
限候爵邸寄附

大藏卿

大隈重信閣下

第三号

是迄相模、駿河、伊豆、甲斐等諸國ノ荒地ニ就キ、余
カ差出セシ報告書ニ続キ、更ニ下野、常陸、下総等
諸國ニ在ル荒地ニ就キ、同様ノ事柄ヲ左ニ上申
セントス、

湯本ハ下野列ノ北西ノ隅那須山脈ノ麓ニ於テ、
海面上二千^トフ^ト許ノ処ニ在リ、右那須山脈ハ、
下野國ト岩代國^{旧會津領}トノ分界ヲ為シ、日光山脈
ト連接ス、偕又日光山脈ノ一山嘴ハ、利根川谷ノ
短キ切レ目ノ外、右那須山脈ヲ築波山脈、及ヒ其

山嘴ト接合セシメ、又東ニ於テハ常陸ト下野ノ
分界線タル、築波山脈ノ一山嘴アリテ、此場所ヨ
リ、遙カニ遠景ヲ望ムノ妨害ヲ為セリ、
右山脈ノ分界以内ニ低キ圓形ノ小山脈アリテ、
下野、常陸ノ二國ヲ分テ、古昔海水ノ退キタル數
多ノ圓谷ト為ス、蓋シ此圓谷ハ昔シ皆海ノ入江
タリシニ疑ナク、而メ江戸ノ海湾及ヒ大海ノ沿
岸ヨリ最モ離隔セシニ、泥土ノ総体ニ深キヲ以
テ見ル時ハ、海水ノ嘗テ漸々ニ其圓谷ヲ退キタ
ルヲ知ル可シ、

泥土ノ質ハ水ノ集堆セシメシ沙石上ニ在ル黒
色ナル植物質ノ肥土ニシテ、其入江ノ水ノ海ニ
出テ尽クスヨリ、數百年以前ニ、周圍ノ山脈及ヒ
丘陵上ニ泥土ノ堆積シ、而シテ其泥土ノ次第ニ
入江中ニ流れ出タルニ因リ、其後水ノ退クニ至
テ、艸木速ニ繁茂シ、其屢生長シテ、又屢枯腐シタ
ルニ回リ、嘗テ無用ノ入江タリシ処モ方今ハ結
構ナル黒色ノ植物質ノ肥土アルニ至レリ、
湯本ヨリ余ハ那須ノ原ト称スル、有名ノ荒地ヲ
稍点檢セシニ、湯本ト横澤トノ間ニ荒地アリテ

此処ハ各種ノ獸類ヲ牧畜ニヨロシキ牧地ト為
ス可シ、此地ハ二里四方アリテ、夏ニ至テハ那須
山ノ如キモ、小木ノ叢生スルヲナク、草ノ繁茂ス
ルニ回リ、亦同シク獸類ヲ牧畜スルヲ得可シ、而
シテ右ノ荒地ハ処々ニ樹木ノ散立シ、其中ニ小
溪ノ之ヲ弯流スルアリ、

其地ノ外面ハ波浪ノ状ヲ為シ、泥土ハ深クシテ
耕耘ニ宜ク、其処ニ在ル数箇ノ小圓谷モ、小キ高
原モ、之ヲ開墾スルヲ得可シ、余ハ其処ヨリ大
和地ト名クル長サ四里廣サ二里ノ平地ヲ通過

セシカ、此善良ナル地方ノ北ハ、那珂川ニシテ、其
南ハ一帯ノ森林、東ハ奥列街道、西ハ那須山ノ麓
ニ在ル樹木植附場ナリ、

此ニ今大和地ノ草木ハ、總テ那須ノ原ニ生スル
各種草木ト其種類ヲ同ウシ、異ナル者ハ極メテ
稀ナリ、今之ヲ掲クルニ、重ナル草類ハ日本ニテ
「カヤト」名クル者ト芝トノ二種ニシテ、此中芝ハ
最モ多ク、又処々ニ「シープ」フエスキユウ草ニ似
タル草アリテ、英國ノ「リブグラツ」草ノ一種モ、
其中ニ雜生シ、又毎年三回ヅ、実ヲ結フ所ノ三

名也 草務局

度粟ノ小樹アリ、此小樹ノ周圍ハ、大抵一「インチ」ノ四分ノ三ニ過キス、其高サハ三「フート」許ニシテ、一株ヨリ三本乃至六本程ノ小樹ヲ生スルナリ、又此地方ニハ処々ニ白色ノ檜樹ノ小ナルモノアリテ、其中至大ノ者ト虽モ周圍三「インチ」ニ過キス、又此原ノ西部ニハ相應ナル大サノ「パイン」樹、処々ニ散立セリ、蓋シ粟ノ樹及ヒ檜ノ樹ノ生長シテ、大木トナラサル所以ハ、此原ノ毎年焼クルニ回ルテラシムルカ、何ニモセヨ、此種類ノ樹木ハ至テ小ナリ、

余ハ右平原ノ中央ヲ流通セル三里許ノ旧溝ニ沿テ進ミシカ、此溝ハ二百年前ニ之ヲ穿テタルトテ、沿岸ニ七箇ノ村アリシニ、之ヲ用ヒシハ唯僅ニ三年ニシテ、當今其堤防破レテ、其持主モ亦死去シタレハ誰アツテ之ヲ修覆スル者ナク、右ノ村モ其地ノ耕耘モ共ニ之ヲ棄テタリト云フ、尤モ以前其土地ヲ耕耘セシ痕跡ハ、今ニ於テ判然タリ、

右ノ地方ヨリ南ニ方テ、西ノ原ト称スル原野アリ、此佳麗ナル原ハ、長サ五里廣サ二里許ニシテ、

其地質モ草木ノ種類モ、大和地原ニ同シク、唯少
シク異ナル所ハ、粟ノ小樹ノ間ニ榛樹ノ散立ス
ルヲ見ルノミ、然ルニ此原ノ東部ニハ、小樹ノ生
スルコトナク、其東西西部ノ間ニ、二十丁乃至一里
ノ一帯ノ森林アリテ、以テ其分界ヲ為シ、其森林
中ニハ、村落モ数ヶ所アリテ、閑墾セシ地モ之レ
アリ、

懇閑セル土地ハ、全ク他ノ原ト同質ニシテ、甚々
豊饒ナリト思ハル、蓋シ右二箇ノ地方ハ、大田原
市中ノ南ト西トニ在リ、而シテ又「¹パイン¹」樹及ヒ

ク「¹クリ¹」ト「¹メリア¹」樹ノ狭キ植附地ニ「¹回り¹」、大和
地ト隔離シ、又奥列街道トモ離隔シテ、又「¹クツカ¹」
ノ原アリ、此原ハ長サ二里廣サ三十丁アリテ、其
泥土ハ大和地ノ原ニ比スレハ、稍低ク且ツ小木
ナキニ「¹回り¹」、其深サモ更ニ大ニ、其質モ亦更ニ良
好ナリ、而シテ此平原ノ東北ニハ、那珂川アリ、南
ニハ樹木ノ繁茂セル低キ丘陵アリ、西ニハ奥列
街道アリテ、此原ヲ少シク離レ、「¹ラドレザワ¹」村ノ
南ニ方リテ、長サ四里廣サ五丁ノ豊饒ナル地ア
リ、○又大田原ヨリ黒羽ニ至ル途中、奥沢村ノ真

北ニ、長サ三里廣サ七丁ノ南^カ子ハラト名クル
原アリテ、此原ノ南西部ニ一ノ小流アリ、此小流
ハ街道ニ接シ、奥澤村ニ近キ処ニテ一ノ湖中ニ
流出ス、蓋シ此地ノ周圍ハ皆森林ナリ、○喜連川
ニ赴ク途中、黒羽ヨリ數丁ノ処ニ在ル、^サヤヨリ
ナダノ原ヲ通過セシカ、此原ハ長サ三里餘廣サ
一里半許ナリ、中央ニ近キ所ニ幅二丁許ノ澤ア
リ、此沢ノ真北ニ廣大ナル平原アリテ、処々ニ浪
立チタル形ヲ為スト、虫モ、総体ニ平坦ニシテ之
ヲ墾闢スルヲ得可ク、獸類ヲ牧スルニ十分ナル

水アリ、蓋シ此地ハ^サヤ村ト、^サビ河トノ間ニ在
リ、○^サビ河ノ南岸ニ福原村アリテ、其処ヨリコ
ノゴ^ト迄ノ路程ハ一里半ナリ、此ニケ処ノ間ノ地
ハ浪立チタル形ヲ為セ、開墾スヘキ場所モ亦
少ナカラス、牧畜ニ用フル水モ亦十分ナリ、
コノゴ^トニ於テ美麗ナル谷アリテ、其地ノ西ニ在
ル丘陵ハ低ク、圓谷モ更ニ廣シ、
西ノ原ヨリ東ニ方リ、^ウエノ原アリテ、東ヨリ西
ニ擴マリ、其長サ五里廣サ二里アリ、其地面ハ全
ク平坦ニシテ、土地ハ豊饒ナリ、

此地ハ昔々分向

キヌ河ノ岸辺ニ在ル阿久津ヨリ西ノ原ニ至ル
道ノ路程ハ八里許ニシテ、ウエノ原ヲ過キリテ
阿久津ニ赴ク路アリ、此路ヲ名ケテ「ハラカタ」路
ト云フ、但シ阿久津ハ西ノ原、及ヒ大和地ト水路
ノ往来ヲ為スニ最モ近キ場所ナリ、○ニシガ
イノ原ハ「ウエノ原」ノ東ニ在リテ、長サ八里廣サ
三十町アリ、此地ノ北西ノ部分ハ黒川ニ於テ阿
久津ニ接シ、其処ヨリ一年中何時ニテモ東京ト
舟楫ヲ通スルヲ得可シ、此地ハ首都ト船路ノ往
来ノ便アルカ故ニ、地價頗ル貴シ、○絹川ハ阿久

新地事考

津ヲ流過シタル後、大抵此平原ト平行シテ流レ、
僅ニ三十町許ノ一帯ノ森林アリテ、平原ト離隔
ス、此所ニ接近シテ長サ一里廣サ五丁許ノ細野
原ト名クル、一箇ノ原アリ、
「ウバガイ」ノ市中ヨリ、直ニ東ニ方リ長サ一里半、
廣サ二十丁許ノ高原アリ、其土地ハ至極結構ノ
質ニシテ、少シク開墾スレハ、多クノ産物ヲ生ス
可シ、此地方ニハ処々ニ散生セル薔薇樹ノ外樹
木ナク、唯雜草ノ繁茂スルノミ、此原ノ名ハ「ウバ
ガイ」ノ原ト云ヒ、其東北部ニ小キ沼澤三ヶ処ア

新地事考

リ、○此原ヨリ北ニ方リテ半里四方ノ原アリ、総
テ此等ノ原ハ朽木縣ノ管下ニ在リ、
筑波山ノ續キヲ踰ヘテ、椽木縣ヨリ新治縣ニ入
リタルニ、筑波山ノ西ト北西ノ面、及ヒ常陸ノ西
部ニ延展スル此山ノ脉絡ハ、総テ茅草小竹繁茂
シ牧牛ニ宜シク、以テ許多ノ牛ヲ飼フヘシ、
土浦ヨリ一里半、水戸街道ノ中ニミギモミノ原
ト云フ地アリ、長サ十里幅一里ニシテ、他處ノ原
ニ在ル者ト同種ノ草木地ヲ被ヘリ
荒川ニテ水戸街道ヲ離レ、竜ヶ崎ヘノ路ニ出テ、

行ク一ニ里ニシテ女化原實ハ高ノ中ニ来ル此
原方一里ノ四分ノ三許アリ、此原ニ接シ女化ト
称スル社ノ正北ニ一良地アリ、地名亦女化ト云
ヒ、其廣サ六千反許アリ、
此地面ハ全ク芝モナシ、此等ノ地ニハ該縣ノ大
属ト同道セシアリ、此地ト水路ノ最モ近キハト
カイガハヨリシテ田畝ヲ經テ通スル路アリ、此
路ノ距離ハ一里半許モアルヘシ、又トカイガハ
ヨリ水戸街道ニ出ツルモ、右ノ地ニ到ルヲ得レ
トモ、是レハ多ク千葉縣内ヲ通ス、扱下總ノ舊牧

此等ノ原ハ朽木縣ノ管下ニ在リ、

場曾テ政府ニテ拂下ニナサレシ頃、ヤマギサハ
 ト称シタル地ヲ経テ通行セシガ、此辺ニハ別ニ
 記スヘキ事アレトモ、此報告ヲ経フル前、更ニ此
 野ノ事ニ就キ説ヲ述ヘント欲ス、此野ハ少クモ
 下総ノ地ノ三分一アリ、新治縣内不毛ノ地ト為
 ス、然トモ上文ニ記スル処々ノ野ハ、那須野ノ原
 ノ内ニシテ、那須山ノ麓ニ初マリ、椽木新治千葉
 ノ縣々ヲ貫キ、江戸海濱迄達スル者ニシテ、唯樹
 木ノ細ク帯ノ如ク列ルアリテ、此曠野ノ間ヲ區
 分スルノミ、

西ノ原大和地及ヒ、ヌクツカハ、那須野ノ原ノ北
 西ノ端ナリ、

西ノ原 長サ五里幅二里

大和地 六里 二里

ヌクツカ 二里 三十町

此三処ノ坪数ハ、三十五万一千二百反余アリ、今
 少許ハ費用ニテ、那珂川及ヒ其支流ハ水ヲ此地
 ニ引キ灌漑ハ用ニ充テ、此曠野ヲ田ト為スヲ得
 ヘシ、

那珂川ノ上黒磯ト称スル地ニ於テ、ヌクツカノ

各也

原ニ水ヲ灌クヘキ処アリ、黒磯ヨリ此原ノ上端
マテ距離十五町ノミ、又那珂川ノ水ヲ大和地マ
テ引クトキハ、是亦、又クツカニ灌クノ容易ナリ
扱右ノ灌溉堀割ノ総費用ハ、之カ為ニ與ル利益
ニ比スレハ、極テ僅ニシテ、此地ヲ墾知スル識者
ノ積ル所ニテ、五万弗許ナリト云ヘリ、且ツ之ニ
加フルニ好キ街道開ケルコトアリ、人ニ就テ議シ、
圖ニ據テ驗シ、精査細訂シテ、右ノ野ノ廣袤ヲ算
シタルニ、百十二萬八千反餘ニシテ、東京ヨリ此
野マテノ距離中數ヲ取テ算スレハ、二十里ニ出

テス、此廣大ノ地、天然ノ美アリテ、繞ラスニ一帯
ノ樹林ヲ以テシ、外ニハ百物繁盛ナリ、氣候モ好
ク、那須ノ高嶺、冷ナル北風、及ヒ西北風ヲ屏障ス、
此寒風ハ年内四箇月ノ間專ラ吹キ、其餘八箇月
ハ南東ノ風吹ケトモ、何レノ方角ヨリ吹クトモ、
山或ハ森林ハ之ヲ屏障スルコトアリテ、牧畜ハ為
ニハ患ナシ、
請フ閣下意ヲ此地ノ事ニ注カンコトヲ、那珂川及
ヒ其枝流ハ那須野ノ原ノ北西ノ部ヲ北西及ヒ
西方ニ向テ流レ、靖川ハ西ノ原ト稱スル原

此原也 事務局

ト阿久津ニテ相接スルヲ見ル、
若シ專ラ稻ヲ作ラハ、政府一反ニ付キ二弗五十
錢ノ年貢ヲ取り得ヘシ、但シ此割合ハ固ヨリ慥
ナル処ヨリ聞ク者ナレトモ、田租中數ノ算ニテ
ハ、稍過多ナルベシ、然トモ此割合ニテ三十五萬
一千二百反ノ年貢ヲ算スレハ、年々ノ収納八十
七萬七千五百弗ノ大數ニ及フヘシ、是レ獨米ヲ
作ル上ノミニテ生スル所ニシテ、蓋シ米ノ外何
モ作ラサルトシテ、直ニ政府ノ収納上ノ所得ヲ
生スヘキナリ、

然ルニ今假ニ後來ノ事ヲ目算センニ、右ノ地所
ヲ二分ニシ、一半ニハ植ルニ、茶ト桑トヲ以テシ、
又一半ハ種々ノ用ニ供シ、及ヒ牧蓄ヲ為ストセ
ンニハ、政府ノ収納必ス更ニ大ニシテ、人民ノ利
益亦將ニ大ナラントス、其茶及ヒ桑ヲ植ウル所
ノ地ニ就キ、茶ハ十年ノ後一反ニ付キ、五十弗ノ
利益ヲ生シ、桑ハ四年ノ後利益ヲ生スヘク、余ヲ
以テ考フレハ、桑茶ノ二品ヨリ生スル利共ニ相
同シカルヘシト為ス、余ノ探索シタル所ノ確説
ニ據ルニ、茶ハ此ニ記スルヨリモ、其利稍多シト、

然トモ右ノ算ヲ為スニ、余ハ其實ニ過キンヨリ
ハ、寧口不足ニ積リタルナリ、一反ニ付キ五十弗
ハ、必ス納マル者トシテ見ルトキハ、八百七十五
萬五千五百弗ノ大額ニシテ、其産百ニ付キ十ノ
税ヲ課スレハ、今日米ヲ作ル農ハ納ムルヨリ、税
モ輕クシテ而シテ政府ハ収納ハ八十七萬五千
五百弗ニ至ルハ、前ニモ記シタル如ク、悉皆稻
田ト為ストキハ、其租僅ニ二千弗余ノモ、
他ノ一半ハ、畑年貢今日ノ割合一反ニ付キ十四
セントヲ拂フトシ、此割合ニテハ、其年貢二万四

千五百十四弗ト為ルヘシ、之ヲ雜税ニ
為ストキハ、九十万十四弗ノ税ヲ得ヘ
ク、稲田ノ税ニ勝ル一ニ万二千五百十
四弗ナリ、
右會計ノ損益ト、政府収納ノ多少ヲ
研究シタ、上ハ、二種ノ耕夫ヲ検査
比較スル一第一ナリ、然ルニ異論ナ
ク、此議ヲ定ムル一ハ難カルヘシ、蓋
シ日本ノ稲田ハ、殆神靈ノ如ク諸人
ノ貴重スル者ニシテ、近來マテ之ヲ

議スル事ハ不敬ナル者ト思做シ、百
價ヲ位スルノ標準ニシテ、公私共功
勞ノ賞モ之ニ回テ、其價ヲ量リ、凡ソ
歳入皆米ノ石数ヲ以テ計ルナリ、日
本ノ未々外國ト通商セサルノ日ハ、
此穀ニ頼テ國ヲ立テタルナレトモ、
之ヲ貴ミテ靈物ト為ス心ヲ用ヒテ、
之ヲ貯フト金モ、凶歳饑饉ノ疾患國
史ニ照々タリ、
外國ト未々通セサルノ日ニ、他ノ穀

類ヲ多ク作り、就中玉蜀黍ヲ作ル
トノ廣ク傳ハリタラハ、饑饉ノ疾
患假令全ク除ク能ハサルモ、大ニ
之ヲ減スルトアリタラシ、米ノ不
作ナルニ當テモ、他ノ穀類能ク其
不足ヲ補フヘシ、此等ノ穀類ハ、米
ト成熟ノ時ヲ異ニシテ、甚々便宜
ナリ、日本ニテハ、カヲ用ヒテ、此等
ノ穀類ヲ作ルノ地ヲ称シテ薄瘠
ナリト為スナレトモ、穀類ノ中米程

谷也、等又分句

心ヲ用ヒ、力ヲ尽シテ、農夫ハ為ニ報賞少キ者ハ
ナシ故ニ日本ノ農夫ハ、百中八十マテ貧ニシテ、
餘ノ二十モ殷富ナラサルナリ、然ルニ余米ヲ作
ル丁ヲ止メヨト謂フニハ非サレトモ、荒地ヲ闢
クニハ、他ノ穀類及ヒ産物ヲ作り、収獲ハ多クシ
テ、其勞ハ少キ者ヲ擇フニ、如カスト為スハ、畑
ヲ耕スニハ、馬ヲ使用スルヲ得、而シテ耕作ノ方
法ヲ一変スヘシ、米ノ田ニハ人工ヲ助クル方法
ハ一モ之ヲ用ユル丁能ハス、他ノ穀物ヲ作ル丁
夥多ナルトキハ、之ヲ食用ニ充ツルモ、甚々廉價

ナルヘシ、其廉價ナルニ因リテ、大ニ米ノ代用ヲ
為スヘシ、而シテ既ニ閑懇セル地ヨリ税ヲ納メ
シメ、又牧畜ノ業ヲ大ニ開キ、是レヨリモ又税ヲ
納シムルトキハ、新ニ財貨ノ源ヲ生シテ、國ノ歳
入増加スルヲ以テ、米作ノ農民ヲ救助スル丁ヲ
得ヘシ、
然トモ或ハ謂フ、他ノ穀物ヲ以テ米ノ代用トナ
ストキハ、恐ラクハ餘分ノ米アリテ、代價下落ス
ヘシト、余輩思フニ、若シ果シテ如此ナラハ、米作
ノ地ハ漸ク減シ、而シテ他ノ作物ハ得分多キヲ

以テ米作ニ代ヘテ作ル者アルヘシ、且ツ方今政
府ハ金税上納ノ法ヲ創メ、而シテ土地ニ何物作
ルトモ、聊カ之ニ管セズ、依テ農民ハ己レノ利益
ヲ計リテ、其土地ヲ隨意ニ用フルヲ得ヘシ、爰ニ
言フヘキ事アリ、何故ニ他ノ穀物ヲ夥多作り餘
分ノ米ヲ輸出セザルヤ、

是レハ緊要ナル問題ニシテ、忽卒ニ論スヘカラ
ス、抑米穀ノ輸出ニ議論アルハ、他ニアラス、之ヲ
輸出スルトキハ、其一分子モ本地ニ復ルナリ
シテ、終ニ地質硠確トナル故ニシテ、獨リ米ノミ

ニアラス、百穀皆然リ、日本ニテハ従前穀物ヲ輸
出セザルニ由リテ、農民其地ノ肥沃ヲ保存スル
ヲ得タリ、然ルニ世界中支那ノ某部ヲ除ケハ、如
此ノ例ナシ、他國ハ其地質ノ硠確ナルニ由リ、千
八百四十年始テ鳥糞ヲ用ヒテ、地ヲ豊饒ナラシ
メシヨリ以來、是ヲペリウヨリ諸國ニ輸入スル
其金高凡ソ三億弗ナリト云フ、今日本ノクノニ
謀ルニ、農業ノ外他ノ諸職業ヲ営ミテ、其餘リア
ルノ穀物ヲ輸出スルモ、成ミキ丈ケ其時限ヲ短
ウシ、其地質ノ肥沃ヲ保存スルニ在リ、然ルトキ

地質硠確トナル故ニシテ、獨リ米ノミ

ハ食物廉價ニシテ、製造ノ業ヲ営ミテ甚タ利アリ、茲ニ海關稅ノ報書ヲ閱スルニ、毛織ノ及物ノ條ニ、日本ノ之ヲ輸入スルノ年々凡ソ四百萬弗ナリ、然ルニ國中ニ在ル所ノ美ナル牧羊場ハ、舍ヲ顧ミス、又砂糖ヲ輸入スルノ年々二百二十萬五千弗ナリ、然ルニ甜紅蘿蔔ノ生長ニ適スルノ地數百頃アリト雖モ、國人之ニ手ヲ下タスナシ、若シ一旦是等ノ地ヲ耕ヤストキハ、日本國中ノ用ニ供スルノ砂糖ヲ製出スルヲ得ヘシ、其他牛酪乾酪ノ如キモ、其輸入ノ價皆數千

弗ナリ、然ルニ豐盛ナル牧養場ハ、空ク其繁茂ハ草ハ凋衰スルヲ見ルノミ、其他輸入ヲ待スシテ自ラ製出スルヲ得ヘキモノ種々アリト雖モ、牧擧スルニ違アラズ、前文ニ據テ考フルニ、米作ノ地漸ク減スレハ、他ノ產物ノ利益多ク、且ツ必用ナルモノ漸ク興ルハ必然ナリ、予之ヲ聞ク、凡ソ國ノ繁榮ハ、職業ノ種類ノ多キニ由ルト、上文ニ言ヘル如ク、產物ノ種類多キハ、繁榮ヲ致ス所以ニシテ、既ニ予ノ日本諸國旅行中目撃スルニ、製茶養蠶ヲ務ムル地方ニ於テハ、其人民美

宅ニ居リ美服ヲ着シ歡樂ヲ極メテ米作ノ農民
ニ勝レリ而シテ其才智ニ至テモ貧富ノ差別ト
同シ

今是ニ種ノ人民ノ職業ノ相異ナル所ヲ比較セ
ンニ米作ノ農民ハ婦人小兒ト雖モ地ヲ墾テ肥
糞ヲ土ニ和シ踏均シテ苗ノ植付ケノ用意ヲ為
ス是レヲ為スニハ泥濘膝ヲ没ス又植付ケノト
キモ田ノ泥濘ナルトハ前ト同シ又千辛万苦ノ
後方ニ實ヲ刈取ルトキモ多クハ水ヲ以テ地ヲ
覆フトアリ是刈取リノ業了ル後ハ之ヲ荷テ夫

々ノ場所ニ至リ穀物ト蒿トヲ分テ穀物ハ莖ニ
載セテ之ヲ放^{チカス}下ス是等ノ業皆了ル後ニハ之ヲ
畚キ之ヲ簸ル等ノ諸事ヲナシテ市場ニ出タレ
或ハ食用ニ充ツルノ用意ヲ為ス而シテ來年ニ至
リ再ヒ苗ヲ植付ケルマテハ天ハ時ハ恵ミラ受
ケズ

人ノ職業ノ較愉快ナルモノニ對シ之ヲ見ルニ
愛憐ノ情ヲ起ストナクシテ却テ少シク歎羨ノ
情ヲ起スモノアリ此度見ル所ハ昂テ田ニアラ
ス畑ニシテ余輩モ寧口田ヲ去テ畑ニ就カント

思へり、夫レ地ヲシテ其寶ヲ出サシメントセハ
之ヲ耕ヤスニ耕作ノ器械ヲ用ユヘシ、鋤ヲ用フ
ヘカラス、是器械ハ甚タ輕便ナレド、甚タ有功ナ
ルモノニシテ、一頭ノ馬コレヲ引キ、一人コレヲ
執テ馬ヲ引廻ストキハ、壯健ノ男四人重キ鋤ヲ
以テナスヨリモ、其功却テ多シ、凡ソ一箇ノ圃ヲ
設ケントスルニ、先ツ為スヘキ事ハ桑茶植育ケ
ノタメニ、地面ヲ用意シ、而シテ予カ今此ニ説出
ス農民ノ如キハ、初メ茶ノ種ヲ蒔キ桑ノ切り技
ヲ地ニ挿ムノ時ヨリ、次第ニ富有トナレリ、蓋シ

農民一タヒ手ヲ下ストキハ、別ニ勞動スルトナ
キモ、天ノ時ハ恵ヲ蒙リテ、毎朝次第ニ富有トナ
ル、夜ハ暗黒靜閑ハ中ニ眠ルト雖モ、桑茶ハ生長
ハ晝夜止ムトナシ、又農民ハ茶ノ垣根ノ間ニ必
許ノ空地ヲ設ケテ、馬ニ耕作ノ器械ヲ附ケテ、之
ヲ引カレメ、雜草ノ生長シテ桑茶ノ肥ヤレヲ奪
フヲ防ク、又粟小麦大麥玉蜀黍ヲ作ルモ、右ト同
法ニテ、只其器械ノ跡ニ從ヒ、馬ヲ指揮スルノミ
又農民ハ狭キ圃地アリテ、牛一匹ヲ養テ乳ヲ取
リ、羊六匹ヲ養テ己レ共ニ家族ノタメニ食料ト

暖カナル服ヲ製ス、右牛羊ノ如キ要用ナル動物
ヲ養フトキハ自然ニ肥糞ヲ得テ、桑茶ニ限ラス
凡テ作物ハ皆之カタノニ善ク生長スベシ
右様ノ園ヲ試シ、三箇年ヲ経テ、今年ハ第四年ト
見做スヘシ、然ルトキハ八反ニ植付ケタル桑ノ
樹ハ、其葉ヲ賣ルトモ、或ハ自カラ蚕ヲ製スルト
モ、所得ノ金ハ一ト廉ノ収納タルヘシ、又今年ハ
家屋モ稍廣クシテ、大ニ安樂ヲ増シ、又今年ハ一
疋ノ牡牛モ巨大ナル親牛トナリテ、二疋ノ子牛
アリ、又羊ハ其數ヲ増シテ三十疋トナリ、一群ヲ

為シタリ、夫レ米作ノ農民ハ、彼ノ泥濘ナル田中
ニ身ヲ没シテカ作シ、今此桑茶培養ノ農民ハ、其
羊ノ毛ヲ剪ミ、其蚕ヲ養フ、情形此ノ如シ、最大ノ
幸福ヲ得ルモノハ、果シテ孰レナルヤ、彼ノ一方
ハ人民ハ蚕ノ卵ハ粟ルヨリ、其場所ヲ設テ糸ヲ
績キ出スマテ、ノ諸變化ヲ見テ、心ノ樂甚タ多ク
ルベク、又子羊ノ戯レテ躍ルヲ看テ、其罪ナクシ
テ、功效多キヲ思フトキハ、誰レカ憐情ヲ起カハ
ラン、又牝牛ヲ見ルニ、乳ヲ出ス、一常ニ一桶ニ滿
ツ之ヲ思フトキハ、禽獸ナカラモ、其勞ニ謝スル

人情ヲ起コス、又眼ヲ轉シテ畑ヲ見レハ、物皆欣々トシテ、心目ヲ悦ハシムルニ堪ベタリ、
今一方ノ米作ノ農民ヲ見ルニ、米ノ収納既ニ了タルノ後ハ、農民ソノ泥濘ナル田ノ荒レタルヲ見テ、過去ノ艱難ヲ顧ミ、未來ハ若辛近キニ、アルヲ想像ス、是等ノ農民ハ、歲月ヲ經ルモ繁昌スルコトナク、次茅ニ墳墓ニ近ツクノミ、二種ノ農民ヲ比較スルニ、其外形ノ異ナルハ勿論ニテ、其幸福安寧ノ同シカラサル、實ニ雲泥ト謂フヘキナリ、斯クテ桑茶植付ケハ、早ヤ十年目ニ至リ、是ヨリ

収納ハ年々ニ増加シ、凡ソハ及ノ地ハ早ク植付ケヲナストキハ、十年目ニ至レハ、女ナク、氏四百弗ノ収納ヲ得ヘシ、
諸是農民ソノ若年ノトキニ、若年ノ妻ト共ニ是園ニ生活ノ基本ヲ立テシナラハ、是頃ニ至テハ、凡ソ三人ノ子アリ、惣領ハ十歳ニシテ、凡ソ茶ト同年ナルヘシ、而シテ茶ノ生長ハ、即チ子ノ教育ノ資本ヲ立ツルタメナレハ、茶ノ世話ヲナスコト子ヲ養育スルト同様ナルヘシ、而シテ己レノ身ハ實ニ獨立ノ姿ト

ナリ、若シ中年ニシテ生業ヲ始メシ者ナラ
シニハ、是頃ハ業ヲ罷テ、安穩ニ日ヲ度ルニ
隨意ナルベシ、
上文ハ日本ノ農民ノ將來ヲ想像シテ、其大
畧ヲ舉タルモノニシテ、固ヨリ十分トセス
且ツ產物中之ヲ日本ニ作りテ、其幸福ヲ増
シ、其財貨ヲ益スモノ、甚タ多シト雖モ、之ヲ
畧シテ只ツノ實地ヲ模寫シタルノミ、
上文ノ餘話ニ於テ、尤モ注意スヘキハ、予
カ目的トスル所第一ニ諸品ヲ雜作スルト

米ノ一品ヲ作ルノ差別ヲ示シ、次ニ田ヲ作
ル者ト、園ヲ作ル者ト、貧富ノ景況ニ差ヒア
ルヲ論シタリ、閱者之ヲ思フヘシ、上文ニ拠
テ考フルトキハ、米作ノ農民ノ天ノ時ノ惠
ヲ得ルハ、六月ニ初テ苗ヲ植育ルヨリ、十一
月ニ之ヲ刈取ルマテ、凡ソ五箇月ノ間ニ止
マルナリ、然ルニ園ヲ作ル者ノ天ノ時ノ惠
ヲ得ルハ、十二月ニシテ、園ノ產出スル所
ハ、田ノ產生スル所ヨリモ、其價大ナル以
テ、天ノ時ノ惠ヲ得ルハ、從テ厚シト謂フ

卷之三

ハ、且ツ氣候ノ變化常ナキハ、大ニ田ニ害
アリト雖モ園ニハ害ナシ、是レ雨ヲ米作ノ
國ノ常ニ繁榮ナル能ハザル所以ニシテ、政
府モ己ニ之ニ見アリテ、地ノ產物ニ稅ヲ課
スルヲ廢シテ、地ニ稅ヲ課スルヲ布告シタ
リ、蓋シ如レ此ノ方法ヲ設ケザレハ、歲入ハ隨
カ、ナリ、ア、タ、ハ、ス、歲入ノ、永、久、ナ、ル、ア、タ
ハ、ス、歲入ノ、恒、ア、ル、一、能、ハ、ス、
日本ノ重モナル產物ハ、專ラ茶ト絹糸トニ
在リ、余述項此國ノ内ヲ旅行セシ時、屢人ニ

問ハレシ事ハ、茶ノ價ハ急ニ下落スル一有
ルマシキヤトナリ、余常ニ必ス是レ有ルマ
シト答ヘタリ、今ヨリ九十九年以前ニ、余カ
國ノ人民僅クニ三百万人ナリシニ、方今ハ
大約四千二百万人ニ及ヘリ、現今日本ヨリ
輸出スル茶ハ、大抵皆我邦人ノ貴フ所ナリ、
我國ハ貨財モ人口モ漸々ニ増加スレハ、日
本ヨリ生スル茶ヲハ、尽ク必用トナラン、故
ニ此產物何程生スルトモ、速ニ買収ス可シ、
日本ノ絹糸ニ於ケルモ亦然リ、世界皆常ニ

卷之三

之ヲ要スルナル可シ、此兩產物其價少シハ
下落スルトモ、他ノ產物モ日本ニ於テ尚更
夥ク生スレハ、其レニ準スルナル可シ、故ニ
之ヲ產出スル者モ、其レ々相當ノ利益ヲ維
持スルヲ得ルヤ必セリ、
余今閣下ノ注意ヲ請フ一事アリ、即チ農人
ト為リタル士族ノ會社ヲ結テ耕作ヲ事ト
スル者ノ有様ナリ、
ヤマギサワノ平地ニ同級社ト稱スル會社
有リ、今ヨリ五年許以前ニ造立セシ農業會

社ナリ、其社中ノ者ハ、皆下総國佐倉ノ人ニ
テ、元來領主堀田侯ヨリ一區ノ地ヲ給シ自
ラ會社ヲ結フ是ナリ、始メ土地ヲ開拓セシ
時ニハ、社中ノ割前一株ニ付キ、僅ニ十弗ノ
價ナリ、尔後荒蕪ヲ開拓シテ之ニ桑茶ヲ植
付ケシヨリ、方今ハ一株ノ價百五十弗程ニ
上レリ、
旧家老二人、重立タル藩士二十二人、會社ノ
起立人ナリ、其初ハ會社所有ノ財產僅ニ
百四十弗ノ價ナリシク、方今ハ既ニ七万二

卷也 百務局

千弗ノ位ニ至レリ、社員方今ハ四百八十人アリ、皆作業ニ従事ス、近來迄ハ唯カ劍ヲ使ヒシ手、今ハ重大ノ鋤、鍬ヲ執レリ、八十人ヲ一組トシテ六組ニ分テリ、每人一時五ケ日ノ作業ヲ為ス、了レハ他人又之ニ代リ、常ニ八十人ツリ、作場ニ居ル様ニ割付タリ、

此輩廣大ノ地面ニ桑茶ヲ植付ケ、且此同法ヲ以テ更ニ多クノ地ヲ開墾セント準備セリ、此桑茶盛熟ニ及ブニ隨テ、會社ノ株式モ其價漸々ニ上

ル可シ、此貴人等器械ノ助ヲ借ラスシテ勞作シ初メ着手ノ前ニハ、僅ニ二百四十弗ノ價ニ直セシ土地ニ、既ニ七万二千弗ノ價値ヲ得シハ、其功亦偉ナリト謂フ可シ、故ニ此會社ハ政府ヨリ特殊ノ承認ヲ得可キ者ナリ、是等ノ諸事業、何程利益ナリトモ、亦更ニ要緊ナル一議有リ、元來四百八十人ノ士族、其内多半ハ家祿ヲ奉還シ、自ラ好シテ農人ト為リシ者ナレハ、是レ全國士族ノ模範ト為レリ、余日本國中ヲ通過シテ、屢士族ノ者ニ接シタルニ、多クテハ自

ラ思フニ、頗ル其呀業ノ事情ヲ知レリト信ス、政
府ニ於テ、彼等ヲ處置スル寛仁ノ良策ヲ施行ス
ルナラハ、國民中ノ知識アル此種族ヲ變シテ農
者ト為ス丁難クラス、必ス余ク此稟報ニ記セシ
カ如キ良農ト為ル可キナリ、然レトモ農業器械
家畜獸等ノ供給ヲ要シ、農業法ノ教示ヲ要ス、此
輩ハ猶荒野ノ地ニ新任セシ者ニシテ、後來豪農
トモ為リ、國ノ財力産物ヲモ、限り無ク増加ス可
キ望アル者ナリ、
此事ニ就テ、計ノ景況ニ説キ及ホス丁ハ姑ラ

ノ置クト、雖トモ、俸禄ニ生活スル人々ヲ變シテ、
産物ヲ生出スル者ト為スノ利益ハ、顯然ニシテ
隠昧スルヲ得ス、

此紙面既ニ十分ノ冗長ニ至ラレハ、余今此ノ
報告ヲ呈シ、且新規ノ農者、若シ農業ノ器械ヲ得
又地ヲ耕スノカトシテ、馬ヲ用ヒ、如何カ成立
シ得レノ理ヲ云フ可シ、馬有レハ、今四人ノ作業
ヲ、一人ニテ為スヲ得、是馬ハ四人ノ勤カニ等シ
キ者ト見做セハナリ、人ヲ用フレト、馬牛ヲ用フ
レトノ差異ヲ云ハハ、馬牛ハ作業シテ、唯其勞作

ニ費ヒレ、食料ノ報ヲ得レノミ、然ルニ工人ハ其
食物ノ外ニ貨錢ヲ望ム、故ニ人ニハ此ノ利銀ヲ
興ハサルヲ得ス、然ルニ馬牛ニハ粗糲ノ食料ヲ
興フレハ足レリ、

世ニ云フ、天下ノ人類ハ、眞実ハ職務ハ、工学家ハ役
目ニ在リ、眞実ハ勞力ハ、心算ハ勞ニ在リト、故ニ
獸類及ヒ事物ノ力ニ依テ、更ニ善ク更ニ易ク成
シ得可キ事ヲ、人自ラ為スハ、是レ其力ヲ空シク
失フ者ナリ、若シ國民必要ノ外ニ、餘剩ノ物無ク
レハ、國決シテ富ムヲ得可カラズ、人力ハ若シ他

ノ力ニ藉ラワレハ、格別ニ天助アル地味氣候ノ
処ヲ除クノ外、多ク此富ヲ得ル能ハズ、然ラハ則
唯勞作ヨリ生スル餘剩アリテ、物ヲ生スルノ力
ヲ増加セシメハ、其割合ニ國ノ富庶ニ隨テ増加
ス可シ、

荒野ノ地ヲ開拓住居スルノ外ニ、内國ノ進善ノ
事業ニ、亦政府ノ注意ス可キモノナリ、利根川ハ
此國ノ最ニ要緊ナル河流ニシテ、兩傍ノ膏腴ナ
ル平地ノ惡水ヲ疏通ス、又三年毎ニ其堤防ヲ決
シテ溢レ出テ、人命ヲ害シ財產ヲ損スルヲ其數

影シテ、之カ為メニ、沃饒ノ稻田モ、時々其害ヲ蒙
ルヲ常トシ、農民ハ三年毎ニ其産ヲ失フコトヲ期
セリ、恰モ苛刻ノ厚税ヲ聚斂セラル、ト一般ナ
リ、若シ此常額ノ租税ヲ課スルナラハ、此沃饒ナ
ル平野モ、是ニ因リテハ、別ニ些少ノ税額ヲ課ス
ルコト無シトモ、或ハ耕作スル者絶ユルニ至ラン
此説ハ津田氏ハ此河流ノ傍ニ住ム人ト會話セ
シ時聞タリ、余ニ話セシ者ナリ、
此害ヲ救フノ策ハ、印幡沼ヲ疏通スルニ在リ、余
聞ク此沼ノ水ヲ防クノ堤、利根川ノ流レ道ニ當

ルカ故ニ、此河流ヲ妨碍シ、其レカ為メニ、河水横
溢スト云フ、印幡沼ハ長サ七里、横幅一里アリ、若
シ旧河道ノ檢見川ニ流出スル者ヲ浚通スルコ
ト能ハワルナラハ、別ニ本田橋川ニ通スル河道ヲ
疏通スルモ、其成功亦難カラサル可シ、
此沼ヲ疏通セバ、沃饒ノ土地大約十萬反許、稻田
ト為ルヲ得可シ、是ノミニテモ、既ニ大ナル開拓
ト為ルナリ、斯ク良善ナル法ノ布令有ラハ、公私
ノ大利益タル可シ、且利根川ノ洪水横溢ヲ弭ム
ルカ故ニ、此土地耕作ノ便ヲ得テ、十分ノ租税ヲ

出スニ至ル可キ、余聞ク、印幡沼ノ水面、江戸ノ海ヨリ高キ、三十尺ナリト、此事ノ真偽ヲ確定セシテ欲セハ、唯一人ノ工学家ヲ用ヒ、即チ足ル可シ、此事總体ノ繁昌ニ関シ、大緊要ノ作事ナレハ、余真成ニ政府ノ爰ニ注意センヲ請フナリ、且又利根川ノ船路通行モ、僅少ノ費用ニテ、大ニ進善スルヲ得シ、斯クノ如クナレハ、商業ノ便利ヲ為シ、運漕ノ費ヲ寡クス、是故ニ今日日本ニ於テ第一喫緊ノ要件ナル道路ノ議ニ及フナリ、古昔ヨリ凡ソ何レノ國ニテモ、自國內ノ商業ノ迅

速ニ流通シ得可キ、必要ノ通路無クハ、決シテ進歩繁榮スルヲ得ズトハ、格言タリ、良善ノ大道ノ至要ナルヲ知ラント欲セハ、國內交易ノ割合ヲ以テ、外國交易ノ割合ト比較シ見ヨ、昨年此國ニテ外國交易ノ總高、大約三千五百万弗ナリ、此一年ノ間、國內ニテ行ハレタル商業ノ總高ハ、必ス六億五千万弗ニ過タルナル可シ、且國內ノ交易ハ、作業ヲ派分シ、隨テ生産ヲ増加スルニ至ルカ故ニ、其利益殊ニ多キヲ知ル可シ、此種大ナル商業ハ、村郷ト都府トノ間ニ行ハル、者ナリ、

良善ノ道路迅速ノ通行ハ運送ノ費用ヲ寡クス
農父ノ手ニ成ル産物ハ概シテ嵩高キ者ナルカ
故ニ税重キ片ハ農夫最モ其害ヲ受ク今夫レ東
京ヨリ一里内ノ地ニ産スル穀モ五十里外ノ地
ニ産スル穀モ農父ノ手ニ入ル金額ハ同様ニシ
テ五十里外ニ産スル穀ハ培養及ヒ運輸ノ費ヲ拂
ク而シテ農夫通常ノ利ヲ収メサル可カラズ然
ルニ道路ヲ修シ水利ヲ通シテ往来ヲ便ニスル
時ハ右ニモ言ヘルカ如ク運輸ノ費ヲ減シ随テ
農夫ノ收入ヲ多クスヘキナリ是レ決シテ例ヲ

挙ケ証ヲ引キテ歎々ヲ待タス經濟ノ理ヲ論ス
ル書中ニハ比々トモ載スル所ナリ
又此結文ニ至テ竊カニ閣下ニ啓セント欲スル
貴國ノ急務數件アリ今之ヲ尤ニ陳列ス
其一荒地開拓之事○此等ノ荒地ハ一々測量ヲ
遂ケ且ツ容易ニ之ヲ偶數ニ分ツヘキ區劃法ヲ
定ムヘシ又其區劃ハ小ニ過ラ可カラス區劃小
ニ過ラレハ耕作ノ時馬ヲ用フル能ハス牧場ト
為ス時ハ數頭ノ牛ヲ放ツヲ能ハス極テ不便
ナリ總テ官地法制ノ立テ方ハ大ニ他日ノ盛衰

ニ関スルコトナリ、

其二目今國內ノ缺ヲ充タスニ足ルホド羊種ヲ
購入スルコト、

其三國內用ニ供スル丈ケノ、シユガルビード菜

ノ其根ヲ用テ砂糖ヲ製スヘシ

植附クルコト方今輸入スル所ノ

砂糖年々二百二十万五千トニ値ヒス然ルニ

日本ノ地ハ大イニビードニ適シ殊ニ此未関ノ

地ハ最モ妙ニソ其種子ヲ播スル時候ニ於テハ

曾テ肥糞ヲ要セス普魯士ニ於テハ近頃頻リニ

ビードヲ植付ケ年々政府ニ收ムル所ノ税凡ソ

八百万ドレンニ及マリ是レ其根ノ目方百ポンド

エトニ十七セントヲ課シテ得ル所ナリ、

從來下總ノ國ニ於テハ盛ニ蕃薯ヲ作レ其益

極メテ薄シ今之ニ代ヘテ少シクビードヲ作テ

ハ得ル所必ス厚カラシム但此ノ如クスル所ハ蕃

薯ノ價騰貴センコトヲ言フ者アセヘシト虽モ砂

糖ノ價隨テ下落スル時ハ自カラ全国ノ益ニメ

以テ其損ヲ償フヘシ是レ日本ノ益ニソ年々日

本ニ輸入スル所ノ砂糖十分ノ一ハ支那ヨリ來

ルナリ日本此益ヲ奪ヒテ他ノ事業ヲ勵マス

蕃薯地事及分句

ハ用ニ充ツヘキナリ
其四外國ノ牛種ヲ輸入シ、内地ノ牛ト交ラシメ
テ、内地ノ牛種ヲ進マシムヘキ事、○東京及横濱
ニ於テ、毎月屠殺シテ食用ニ充ツル所ノ牛種大
凡八百頭ニ下ラス、其一頭ノ重カ平均三百二十
五ポントトスル時ハ、全量凡ソ二十六万ポント
ニメ、其中三分ノ一ハ、必ラス内人ノ費マシテ所ナ
リ、且ツ内地ノ人ハ、其古来ノ風習又ハ其佛ヲ奉
スル等ノ故ヲ以テ從來動物ヲ殺スルヲ忌ミタ
レ、近來ハ、復此等ノ説ニ拘セス、況ンヤ動物ハ

皆人ノ為メニ殺サル、
ノ食ヲ貯蓄スルヲ能ハス、人之ヲ殺サレハ、遂
ニ自カラ餓死スヘキ者ナリ、然ルニ内地ノ人日
ヲ逐フテ、此真理ヲ悟トレノ勢ヲレハ、肉食ノ日
々ニ盛ナラン、期シテ待ツヘシ、而メ余ノ聞ク
所ヲ以テスレハ、此ノ如ク、牛ヲ屠フルノ日、ニ多
キヨリ、内地ノ牛種漸ク乏シキニ至ルト云々、然
ルニ内地ノ牛ヲメ、外國ノ種ト交ラシムレハ、其
生子必ラス大ク増スヘシ、方今日本ノ牛ハ平均
三百二十五ポントトシ、過ギサレ、此交合ニ依テ

澤タル牛種ハ必ス五百ポンドニ至ルヘク又更ニ厚ク交ラシムレハ尚其巨大ニ至ラント疑ナシ且ツ大牛ヲ飼フハ費ハ其小牛ヲ飼フト大ニ加ハレトナクシテ其益ニ至テハ大抵四百ポンドノ牛ト六百ポンドノ牛ト恰モ其量ニ比例シテ價ヲ異ニスヘシ又是ノミナラス其皮ヲ用セテ韃^{タタ}造^{ゾウ}ルノ益アリ目今牛皮及畜類馬具等ノ輸入ヲ算スレハ殆ト百万ドルニ近シ右言フ所ニハ牛乳牛酪及乾酪等ハ算入セザレバ是レ又多少ノ益アルベキ者ナリ

又横濱東京ノ兩所ニ於テ屠ル所ノ羊ハ皆支那ヨリ輸入スル者ナレバ日本ニ於テ此至貴至要ナル動物ノ數百万ヲ牧スルヲ難カラス、其五内地土功ノ事、○内地修繕ノ已ク可カラザル者フルトニ就テハ貴國ノ久シク交リテ修シタル和蘭ヲ以テ例トスルヨリ善キハナシ、旧史ニ拠テ之ヲ考フルニ、此國原トハ渺漠タル沼澤ニシテ、獨リ軟泥ノ丘阜、又ハ巨大ノ樹林、汚水ノ間ニ星布シ、其地多クハ海面ヨリ低キナシ、河川ノ漲溢、海潮ノ浸入、絶ユル時ナカリシカ、此

國ハ人ノ能ク知ル所ナレハ其海ヨリ奪ヒ取り
タル豊饒ナル土地ノ形状ハ余ノ記載ヲ要セス
曩キニ大洋ノ侵入ヲ防キタル者ノ子孫方今ズ
イドレ海ヲ乾涸セント企ツ此工事ハ成功ニ至
ルマテニハ許多ノ歲月ト数百万弗ノ費用ヲ要
ス可シ一ノ有名ナル佛國政事家(余スレリ)氏
ナリト信スノ言ニ從前一葉ノ草ヲ生セシ地ニ
西葉ノ草ヲ生セシタル者ハ人類ノ患人ナリト
然レ時ハ不毛ノ濕地ヲ變シテ豊饒ノ田野ト為
ス人ヲハ何ト者做スヘキヤ印播沼乾涸ニ属ス

ル此小ノ費用ト工事トニ因テ得ヘキ富ヲ論セ
シ沼ヲ乾涸スレハ豊饒ナル稻田凡ツ十方及ヲ
得可シ沼ノ畔ニ在ル稻田ノ價ハ每一反六十二
弗五十セントナリ右ノ價トスレハ日本帝國ハ
六十二万五千弗ノ富ヲ得ヘシ沼ノ乾涸ヨリ利
根川ノ谷ニ應驗ヲ生スルトハ上ニ述ヘタリ若
シニシノハラオワチヌツカノ平地モ田地ト
為リシナラハ大藏省ニ年々九十万弗ノ歳入ヲ
増ス可キトモ亦既ニ論シタリ
道路ノ要シキニ因リ此地ノ產物ヲ運送スル費

用多ク、産物ノ價ヲ騰貴セシメサルヲ能ハス、一人ノ力ハ平坦ノ道路ニ於テ、二百ポンドノ重ヲ一時間ニ、英ノ一マイル運送スルヲ得、一馬ノ力ハ、同時間ニ一千八百ポンドノ重ヲ運送スレヲ得、助キ九人ノ力ヲ合セタルニ均シキモノト算ス、荷物ヲ載セタル車ヲ牽ク馬ト、荷物ヲ負駄シタル馬トハ、人ト馬トノ間ノ如キ比例ナリ、但其差ハ人ト馬トノ如キニ至ラス、若シ良キ道路ヲ造ラ、現今荷物ヲ擔テ、運送スルヲ業トスル者ハ、殆ト十分ノ九ト、馬ノ背ニ負駄シテ

運送スルノ勞ヲ省キ、九名ノ人ニ有用有利ノ職業ヲ興フルヲ得可シ、假ニ東京ヨリ五里日本隔リタル處ニ、十口ノ小村アリテ、各東京ニ産物ヲ駄送スル為メ、一匹ノ馬ヲ有セリト看做セハ、十人ノ農ヲ、各一馬ヲ所持シ、之ニ産物ヲ駄シ、各馬ヲ牽テ家ヲ去リ東京ニ往返スル為メ、必ス一日ヲ費ヤス、若シ其中ノ一人一輛ノ荷車ト、二匹ノ馬ヲ所持セハ、十人ニテ運送シタル産物ヲ、一人ニテ運送シ、時間ヲ費ヤスヲ亦少ナシ、諸九人ノ者、荷車ヲ所持スル者ニ對シテ、汝我輩ノ産物ヲ

運送セハ我輩汝ノ為ニ各一時間汝ノ田地ヲ
耕ス可シト言フ可シ即九時間ノ勞ヲ以テ荷車
ヲ所持スル者ノ東京ニ往返スル時間ヲ償フ或
ハ九人ノ者九時ヨリモ稍多ク勞動スルモ猶大
ナル所得アリ之ニ依テ九人トハ馬ノ勞ヲ省キ
他ノ利益アル事ニ用フルヲ得ルヲ知ル可シ蓋
是等ノ人ハ各一週ニ一度若クハ一月ニ四度東
京ニ行クヲ要ス可シ然レ氏荷車ヲ用ルルヲ
為ノ毎月每週ノ誤乎六日ノ所得アリ此ノ如キ計策
ハ之ヲ擴張シテ廣ク全國ニ及ホス可クシテ其

廣大ナルヲト大ニ勞動シ省クカ為ソ生スル利
益忽チ世ニ顯ルル可シ方今佛國ノ大ニ繁榮ナ
ルハナポレオンノ就シ及ニ就サント企テタル
國內改正ノ工事ニ由ルヲ甚タ大ナリナポレオ
ンハ大將ノ地位ニ在テ能ク人ノ價值ヲ知り一
毫モ其身体ノ力ヲ無用ニ費カス國君ノ地位ニ
在テモ人ヲ有益ノ事ニ供スル同一ノ大理ヲ認
メタリ政事家ハ一國ノ大將ト少シモ異ナル所
無シ若シ一國ノ大將陣中ニ多ク懶惰ノ者アラ
シハ兵卒ノ糧食ヲ運輸スル者過多ニシテ其他

ニモ無用ニ使役セラル、者多キ時ハ隨テ有用
ノ兵負ヲ減ス、一國人民ニ付テ論スルモ亦之ニ
同シ、西洋諸國ニ於テハ、良キ道路ヲ必要ノ第一
ト為シ、秘魯ハ人口總クニ三百万ニ過キザレド、
道路築造ニ一億弗餘ヲ費ヤシタリ、道路築造ハ、
産物運送ノ費ヲ減シ、僻遠ノ人民ヲシテ、産物ヲ
市ニ出スノ便利ヲ得セシムルノ外、人口稠密ノ
地ニ於テ、衣食ノ價ヲ減ス蓋シ是マテ産物ヲ市ニ出
ス、トテ得サリ、人民新ニ運輸ノ便利ヲ得レハ
ナリ、下野ノ大田原近傍ニテハ、東京ニテ十弗若

クハ十二弗ノ價ナル大ナル松木ヲ金一分ニテ
買フ、トテ得木炭其他大田原辺ヨリ、東京へ送ル
トテ得ル物品ハ、皆然リ、其他國內ノ通路、益、便ヲ
得ルハ、夫レニ隨テ、帝國益々固シ而シ、通路ヲ便ニ
スルニハ、鍊道ヲ建築スルヨリ勝ル、トナシ、然レ
而シ、先ツ道路ヲ修メ、然レ後ニ鍊道ヲ建ツ可シ
道路通スレハ、之レカ為メニ、往來便ヲ得、往來便
ヲ得レハ、乃テ金銀貸借ノ便ヲ得、金銀貸借ノ便
ヲ得レハ、其利足低クナル、今迄貸借ノ利足ハ高
キハ、道路通セス往來ノ便ヲ失スルニ由レルナ

第六製造

輸入諸織物ノ内毛織物ノ價而已ニテ、五百萬弗
 ニ越ユ、是レ國人之レテ製造スルノ本質器械ナ
 シ、且ツ其術ヲ知ラサルヲ以テ、斯クノ如キ大ナ
 ナレ國益ヲ失ス、故ニ之ヲ國內ニテ製造セス、
 バノラス之ヲ製造センニハ、本質ヲ國內ニテ得
 ルヲ專一トス、而シテ國內ニテ之ヲ得レハ、之レ
 ナ爲トニ、自然道路通ス、其故ハ道路通セザレハ、自
 然路程遠シ、路程遠ケレハ、利ヲ得ルコト少ケレハ、

ナリ

昨年予永ク日本ニ住シ、且ツ此製造事務ニ廣ク
 通セレヲ以テ、日本ニテ羊ヲ畜養スル莫ニ付キ
 予ノ見込ヲ採用アルノ譽ヲ得タリ、由テ更ニ左
 ノ如クアランコト、予ニ於テ少シモ疑フコトナシ、羊
 ヲ畜養スルノ善法ヲ得、且當國ノ牧草氣候ニ適
 セル種類ヲ買ヒ入レテハ、數年ニシテ日本本質
 ヲ得テ、斯クノ如キ有用ノ産業ヲ起スヲ得可シ、
 而シテ之ヲ盛大ナラシメンニハ、畜養スル者ト、
 製造者同心協力シテ、莫ヲナサズンハ、アテス、而

双方共ニ同心協力シテ、
得ル利益大ナリ、若シ日本ニテ、
國産ノ用法ヲ得テ、
國ノ富強ニナラザラン
欲スト、
國民ノ富強ヲ欲スルニ随テ、
此業ヲ興シ、
此地ノ氣候宜シキニ適シ、
地面膏腴ニテ、
地ノ利ヲ得ルヲ疑ヒナシ、
然レ時ハ日本執政家日ヲ
スシテ、
西土ノ人民ノ意見ニ倣ヘ、
教ヲ受テ、
人民ヲ支配スルニ至ル可シ、
之レ他ナシ、
人民ハ教ニ從テ、
变化ス、
故ニ才智ヲ培養スレ、
見識

定マリ、
謀ル所高シ、
志氣大ニナリ、
孤陋ノ心日ニ消ス、
日本モ亦斯クアラント必セリ、
此大事業ヲ興シ、
後來ノ者ノ為メニ、
有用ノ道ヲ開キ、
幸福ヲ受ケシム可シ、
然リ而メ、
富強ヲ得ルハ、
基礎タルモノハ、
人民ト土地トナリ、
日本ニ大基礎アリ、
而メ之ヲ用ユルノ道ヲ得ザルヲ以テ、
故ニ、
凡百ノ更進歩セス、
富ヲ増ハス、
開化進ムニ、
隨テ、
要スル物ヲ得ス、
之レ等ノ更ヲ及復、
熟思アリテ、
当今ノ執政家ニ、
國民ノ望ヲ起スヲ預メ、
知ラシメ、
且國民後來必ラス、
懇望セン、
トシ、
現今ニ

解明ナシ給フ可シ頓首謹言

シヨオン

日本東京千八百七十五年第一月二十三日

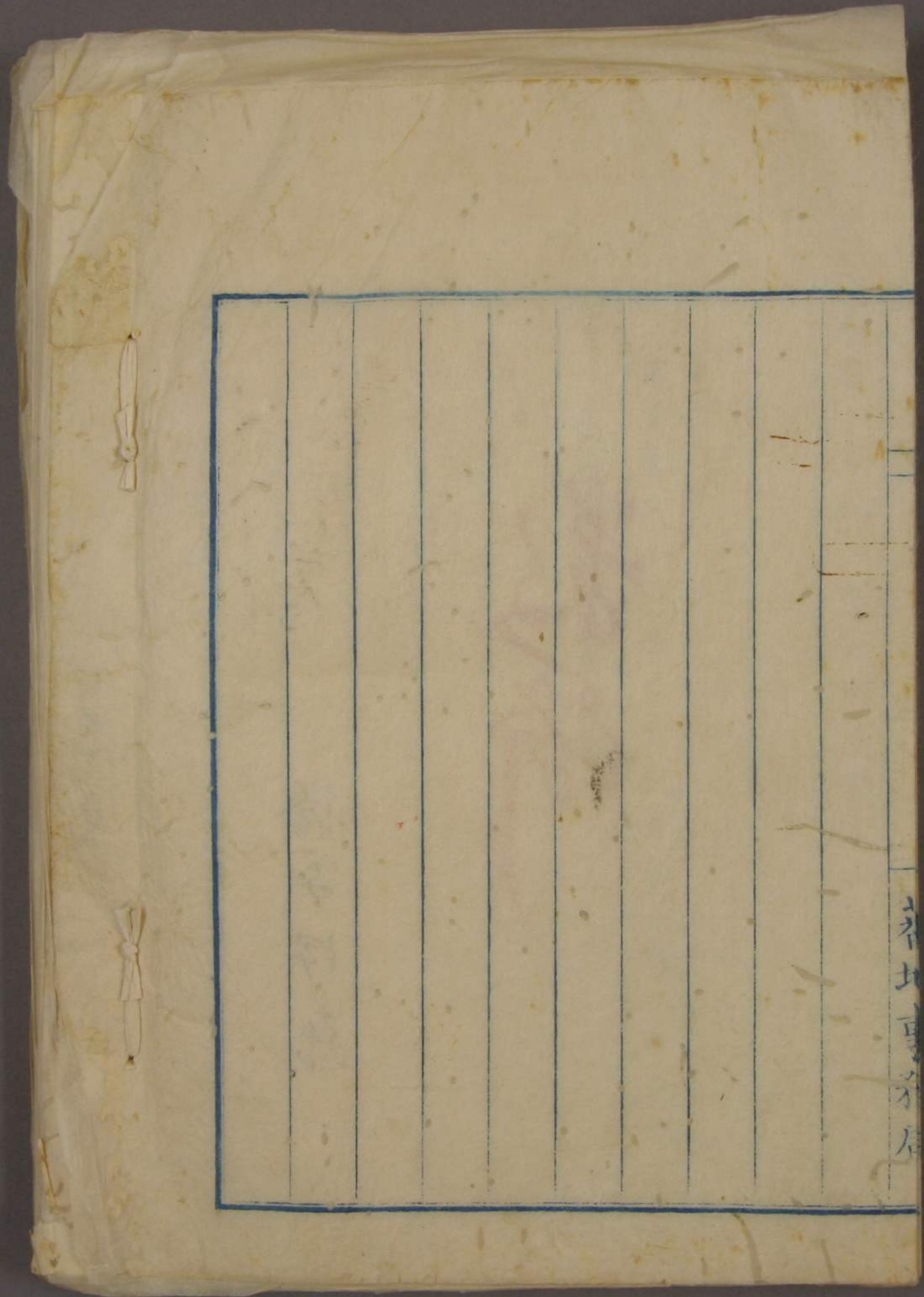
大藏卿大隈重信閣下ニ呈ス

大藏卿重信

新編

謄写浮草

大藏卿重信



北
東
南
西